

作業イベントのにぎわい



佐藤 方博

生態工房が活動している人口密度の高い地域では、湿地や草地での作業を一般参加イベントにすると、かなりの人数が集まります。10年くらい前だと、「生きものから保全へと関心を深めたディープな人」が主に参加していたような記憶がありますが、最近では生きものに関心を持っている人が、気軽に保全活動にも参加しているように見受けられます。保全活動の敷居が低くなっているようです。

いま、参加者の中核は若者や親子連れです。SNSやメディアで保全活動を知っていて、念願叶ってやっと参加できた、という人もいます。電車を乗り継いで2時間かけて来たとか、新品の胴長靴で今日デビューする、という人が毎回います。そして何人もの人が、参加したきっかけとして、ある書籍との出会いを挙げるのです。「自宅で湿地帯ビオトープ」(中島淳・著 大和書房)。庭やベランダでの、水辺の生きものの生息空間づくりの楽しみ方を紹介した本ですが、自宅から興味が広がり、あるいは自宅ではできないので、自然の中で実践してみたいくなったのだと言います。わたしはこの本が少なからず、保全活動のライト層を自然の中へ誘ったのではないかと考えています。

活動の場を求めている人が大勢いるわけですから、当会には保全活動の機会を積極的に提供することが求められます。そして保全活動は、生物多様性を回復させるネイチャーポジティブにほかなりません。すでにイベントの回数を増量中で、去年までは内部で実施していたいくつかの作業をイベント化しました。これで十分ということはないので、さらに門戸を広げる方策を考え、保全活動の担い手を増やしていきたいと考えています。

